

# 愛情表現の日米対照研究 ―日米の映画比較―

異文化コミュニケーションゼミナール 1314014 梶原 颯

## 1. 研究動機・研究目的

日米の映画を比較して見てみると、明らかな違いがあることに気付いた。それは主人公や登場人物の人種や言語が異なるだけではなく、映画の中で示される愛情表現が全く異なっているのである。そして違いを見ることが出来る映画における愛情表現は、男と女の関係性の中だけではない。映画には、親子、人間と自然、人間と動物等、ジャンルによって様々な愛情表現が描かれている。例えば家族間の愛情表現だけを見ても日米の映画の違いがよく分かる。日本の家族はどれだけ仲良く描かれていたとしても、頻繁にキスやハグを行うことはない。ハグ程度であれば稀に描写されるが、家族間でキスをするシーンはほぼ見ることはない。ところがこれが米映画となるとその真逆である。家族間のキスやハグが日常そのものなのである。実際に米国の人々は家族がキスやハグをし合うのは日常的な行為でもある。このように考えれば、米語の映画の愛情表現が激しくなるのは当然のことだといえるだろう。これは日米の映画の愛情表現の違いの一例であるが、本論文では日米の映画の日米の愛情表現の違いを比較しながら明確にしていきたい。私は芝居をしていて愛情表現の演技をする時にまだ羞恥心や気恥しさがあって上手くできない。そこで、愛情表現について異文化理解という観点から分析すると日米の違いから何が分かるのか探してみたいと考え、この研究を扱うことにした。

コミュニケーションを円滑に行うためには、相手の国の文化や社会を知ることが必要である。その上で、自国の文化を再認識し、お互いの文化を尊重し合うことが重要である。本稿は、恋愛の愛情表現という限られたカテゴリーを扱う研究ではあるが、研究から得られた知見をもとに、両国の文化の相違を明らかにする一方で、お互いの共通点も探りながら、異文化コミュニケーションの理解に貢献したいと考えている。

本研究の目的は日米語間の愛情表現を比較、分析することにより、各言語、文化における特徴や価値観の違いを明らかにすることであった。映画において同じ状況でも国や文化の違いによってどのように愛情の表現に違いがでてくるのかを分析するため、映画での愛情の言語表現を分析するとともに、身体や表情での非言語表現の観点からも分析を行なった。また、各国の言語文化の理解を深めることで異文化コミュニケーションを円滑にすることにも役立てたい。

## 2. 研究方法

日米の愛情表現における比較、分析を行うために、2005年以降に製作された映画で、ジャンルは恋愛表現の描写が豊富であると考えられるラブストーリーに限定した。本研究に

における愛情表現の定義は「恋愛的な愛情を抱く対象への愛を言語や行動で表現して伝えようとする行為」とした。研究方法は具体的には、同じ状況下での会話の言語表現と、その会話の前後にのみみられた、行動や表情といった非言語表現を比較、分析した。また、非言語表現の種類と頻度も検討した。

### 3. 主な結果と考察

日本映画の特徴としては、控え目、穏やか、静寂、沈黙、素朴、秘めた思い、和合、抽象的という特徴がみられた。それに対して、米国映画の特徴には、派手、オーバーアクション、スキンシップ、言葉数が多い、自分をよく見せる、周囲にアピールする、競争意識、直球勝負などが観察された。

日本の映画における愛情表現は情緒的であり繊細である。米国映画の愛情は正義として、力で表現されることが少なくない。愛情は言葉だけで表現されるものではないのである。日米の映画の愛情表現を比較して見ていけば、日米の文化の違いまで見ることができるのである。

### 4. 結論

日本映画と米国映画における愛情表現の使用頻度と頻出回数、言語による愛情表現の前後に見られた非言語による愛情表現の頻出回数の分析を行った。当初の推察で結果に国ごとの特徴が顕著に観察されると思われていた通りの結果となった。しかし、それだけでなく、両国に観察された表現等も多々観察された。

結論としては、仮設の通り、米国人の方が、愛情表現を多用し、そのほとんどは直接的愛情表現であった。直接的愛情表現の中では、言葉によるものだけでなく、親しい間柄であれば、キスやハグも含まれる。一方、日本では、曖昧な表現である間接的な愛情表現を行っていた。特に褒めるなどの行為で相手に対し、好意を伝える場面が多かった。

### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究では、日本と米国の映画における愛情表現に着目したが、先行研究の段階においても、異文化コミュニケーションや文化の違いなどを理解するメリットといった今後の人生において役に立つ知識を得ることができたのは大きな収穫であった。

卒業論文を作成するにあたり、学問の奥深さと、研究することの難しさを痛感させられた。須藤路子教授には大変お世話になった。本論文を添削してくださった際には、些細なことにも、的確なアドバイスをしてくださった。須藤教授には、色々と迷惑をかけてしまったが、決して私のことを見放すことはせず、指導をしてくださった。英語だけでなく、人生についても多くのことを学んだ。大学の4年間でお世話になった須藤先生をはじめ、諸先生方には、心から感謝の意を示したい。この研究から学んだことを今後の人生に活かせる場面があれば幸いである。